

ことわざアレコレ

愛縁奇縁。確かにそういうことは有りますね。
いろんな友達がいる中で「心を許す」友達がいます。特に考えることもなく自然にそうなっています。気が合い親密になるのは不思議な縁によるらしいです。そういう友達は大切にします。

2025・6・1

努力に勝る天才なし天才と称される「王」「イチロー」「大谷」も人一倍の努力を続けて来た(いる)からこそ天才的な大記録を打ち立てることができたのだと思います。努力がなければ達成できない記録でしょう。凡人であっても努力を重ねることによって「天才」の領域にたどり

着くことが可能です。全てのことに努力こそが人を成功に導くことになると思います。孫にも言っています。

2025・6・2

門前市のごとし家が富み栄えていることをいう。来客でいつもにぎわい、家の前に市場のように大勢の人が集まるさまを指す。政治の世界でも似たようなことが起こりますが、その反動も怖いものがありますね。

2025・6・4

狭き門より入れ安易な道より困難な方法を選んで努力する方が立派な人間に育つことをいう。本来は天国の門は狭く険しいのでそこを通るには努力が必要だということ。(キリストの教え)
2025・6。9 渇しても盗泉の水を飲まず困っても不正なことは一切しないとの意。盗泉は中国

にある泉の名。孔子が旅の途中この地を通りかかり、喉が渴いていたが泉の名を嫌ってその水を飲まなかったという故事から。誰かさんに聞かせてやりたいですね。

2025・6・13

河海は細流を挾ばず度量が大きく人を分け隔てなく受け入れることのたとえ。また他人の意見を受け入れるだけの度量がないと人は大成しないという教え。同義語として「大海は芥をを挾ばず」があります。河は黄河、海は普通に「海」を指します・

2025・6・18 株を守りてウサギ

を待つ古い習慣や方法を頑固に守っていて進歩がない事。中国の古代宋の国で男が切り株にぶつかって死んだウサギを得た。それ以来男は働

かずに切り株にぶつかるウサギを待ち続けたという故事から。

2025・6・23

馬鹿ほど怖いものはない愚か者や世間知らずは理性や常識では考えられないことをしでかすので予測もつかず警戒のしようもなく危険だということ。例えばトランプや鳩山由紀夫を指す。

2025・6・28

大恩は報ぜず小さな恩にはすぐ恩返しするものだがあまりに大きい恩にはかえって気づかず報いようとしなないものだという事。提灯を借りた恩は知れど天道の恩は忘れる。

2025・6・29 顧みて他を言う 答えに困り他のことを言ってその場を紛らわすこと。問題をずらしてごまかすこと。中国の齊の宣王が孟子との問答で答えに窮し左右を見回して関係のない

ことを言った故事から。「痛いところを突かれると顧みて他をいうだけの国会答弁には愛想が尽きた」と言う
時に使う。今の政治の世界にはびこっています。

2025・7・3

猿の尻笑い 自分の欠点を棚に上げて、他人の短所や欠点をあざ笑う愚かさをいう。猿が自分の尻も赤いことに気づかず、ほかの猿の赤い尻を見て笑うと言う意味から。

2025・7・5

牛の角を蜂が刺す なんとも感じず平気なこと
また手ごたえがない事。牛の角を蜂が刺しても痛くも痒くもない事から。政治の世界はどうでしょうか。伊東市の彼女が思い浮かびますね。

2025・7・14

曾参人を殺す 嘘や間違ったことを何度も言われると最後には人がそれを信じるようになることをいう。曾参(そうしん)は孝行で有名な孔子の弟子。今の世相を考えると、うなづける部分

があります。参院選を見ると SNS 上で嘘の情報が多々あるようですがそれを鵜呑みにする者が多いそうです。そんなことで政治が左右されてはたまりませんね。

2025・7・19

月満つれば則ち欠く盛んなものも絶頂を過ぎれば衰えゆくものであるとゆうこと。繁栄を誇っておごり高ぶるのを戒めた言葉。自民党と大躍進した二つの政党に伝えたいですね。

2025・7・24

汗馬の労 人のために忙しく走り回って苦勞すること。尽力や功勞をねぎらう際の言葉。馬に汗をかかせるほど戦場を駆け回って立てた軍功の意。「諸君の汗馬の勞に対し会長から金一封を預かっている」と言うように使う。

2025・7・29 一犬影に吠ゆれば百犬声に吠ゆ誰かが言っただけの加減なことでもとにかく世間は事実として言い広めてしまうものだということ。選挙でも sns でウソ情報が流れていますが困ったものですね。

2025・8・3、鰯の頭も信心から つ

まらないものでもそれを信仰すれば尊くありがたく思えること。又その種のつまらぬ迷信をからかうことば。少数政党が乱立していますが、なかにはオウム真理教や統一教会まがいの政党もありますので冷静に対応しましょう。

2025・8・9

皿嘗めた猫が科を負う 主犯や首謀者は捕まらず、手下や小物だけが捕まって罰せられることのたとえ。魚を食べた猫が逃げた後で、空の皿をなめていた別の猫が捕まって罰を受けることから。詐欺グループの実態がそのようですね。

2025・8・15 三寸の舌に五尺の身を亡ぼす 不用意なおしゃべりや失言によって災いを招き身を亡ぼすこともあるのでうかつな発言を慎めと言う戒め。わずか三寸の舌が原因で大きな体を亡ぼすと言う意から。芸能界によくみられますね。

2025・8・24

土仏の水遊び そうと知らずに危険な行動をすること。また自分で自分の身を破滅させるようなことをすること。土でできた仏像が水浴びをすれば崩れてなくなってしまうことから。

2025・8・30

鹿を追う者は山を見ず 夢中になっていると周りに気を配る余裕がなくなることのたとえ。目先の利益にとらわれて本来の目的や道理を見失うこと。

2025・9・5 地獄の釜の蓋が開

く 正月と盆の16日には誰もが仕事を休むことをいう。この両日は地獄でさえ罪人を煮る釜の蓋を開けて休むと言う意。昔はこ

の日を藪入りとして使用人にも休暇を与える習慣があった。

2025・9・20 地蔵は言わぬがわれ言うな

人に秘密を話すときには、相手に口止めをして、その相手は誰にも言わないのに、当の本人がうっかり話をしてしまうことが多いので、自分の口に気を付けろと言う戒め。

お地蔵様が前で悪事を働いた者が、地蔵に「どうか黙っていてください」とお願いしたところ、この言葉を返されたと言う昔話から。

2025・9・28 霜を履んで堅氷至る(しもをふんで・・・) 物事には必ず何らかの兆しがあるので、少しでもその前兆が見えたら、大事に至る前に用心せよとの

戒め。霜を踏んで歩くようになると、間もなく堅い氷の張る厳しい冬が来ると言う意から。

2025・10・3 糟糠の妻は堂より下さず(そうこう くださず) 貧しいころから長年苦労を共にした妻を、成功した後も大切にすること。糟糠は酒粕と米糠で粗末な食べ物。堂は座敷。

2025・10・11

末大なれば必ず折る(すえだいなれば ----)

組織は下の者の勢いが強くなると、上に立つ者の統率が及ばなくなり、いつかは倒されてしまうということ。枝が伸び葉が茂っ

て重くなると、頑丈な幹も折れてしまうことから。

2025・10・25 虎の威を借る狐

自身は何の力も無い者が、権力者の後ろ盾を得て偉そうに構えること。虎に食われそうになった狐が

「自分は百獣の長に任ぜられている、自分の後ろについてくれば判る」と言った。すると、狐の後ろを歩く虎を恐れて他の動物は逃げ出したが、それを虎は狐の威厳のせいだと思って狐を食い殺すのをやめたという寓話から。どこかの総理大臣がやっていることとソックリですね。

2025・11・1 針とる者は車を

とる 小さな悪事から始まって、やがて大きな犯罪につながる事。針を盗んだ者を、わずかな罪だからととがめないでいると、そのうち車のような大物を盗むようになるとの意。

存立危機事態発言が「はじまり」であって実は戦争という大きな事態を招こうとしている、どこかの総理のようですね。

2025・11・24

日暮れて途遠し(・・みちとおし)

晩年になっても、生涯の目的の達成まで程遠いこと。やるべきことは多いのに残され

た時間はわずかしかないこと。日は落ちたのに目的地までは、まだかなりあると人生を旅程になぞらえた言葉。

2025・11・30

人と屏風は直ぐには立たず 世を渡るためには、正義を振りかざすだけではなく、主張を曲げて、妥協することもある必要になるという事。屏風を立てるには、折り曲げなければならない事にたとえた言葉。

2025・12・6

人を呪わば穴二つ 人を呪ったり害を与えたりすれば、自分にも呪いや害が返って

くると言う教訓。穴は墓穴。誰かを呪い殺した者は、その報いで自分も葬られるので、合わせて二つの墓穴が必要になるという意。

2025・12・13 髀肉の嘆(ひにくのたん) 有能な人物が、その能力を発揮する機会を見いだせないこと。髀は腿。中国の三国時代、蜀の劉備が、戦場で活躍する機会に恵まれずにいるうち、かつては引き締まっていた太股に、贅肉がついてしまったのをみて嘆いた故事から。

百里を行く者は九十里を半ばとす

物事は締めくくりが大事であること。物事は最後に難関が待っていると心得、気を引き締めよという戒め。百里の工程のうちの九十里を、やっと半分に過ぎないと考えよという意。

2026・1・5 符節を合するが如し

二つの物がぴたりと合致すること。両者が寸分たがわぬこと。符節は割符。木片などに「しるし」を書いたうえで、二つに割り、後日のための証明にするもの。

2026・1・11

冬来りなば春遠からじ(きたりなば)

厳しい冬の後、温かい春が訪れる。今は不幸でも希望が見えていると言う意。

2026・2・11 古川に水絶えず(ふるかわに)

昔から富裕だった旧家には、没落しても財産が残っているものだという事。確かなものは、衰退してもすぐには滅びない事。枯れたように見える川でも、細々と水は流れ続けていると言う意。

2026・2・23 柳に雪折れなし

柔軟でしなやかなものは、弱そうに見えても、頑丈なものよりむしろ強く、厳しい試練にもたえうるということ。 2026・

4・12

山師の玄関 内容のないものがうわべだけ豪華に飾り立てる事。山師は詐欺師を指す。相手を信用させようとして、外から見える家の玄関だけは立派に構えることから。

2026・4・27

山、高きが故に貴からず

見かけの見事さよりも中身が肝心だと言うたとえ。人間の値打ちは見かけより人格や知恵にあると言う事。後に「樹あるをもって貴しとなす」と続く。山の価値は高さではなく、樹木が茂っているところにあると言う意。

2026・5・10

羊頭を懸けて狗肉を売る

見せかけばかり立派で、内容はまるで劣っていること。どこかの国の代表者みたいです。

2026・5・17

欲の熊鷹、股裂くる

欲望を満たそうとするあまり、身の破滅を招くたとえ。熊鷹は大きな鷹。熊鷹が二頭並んだ猪を同時に捕えようと片足に一頭ずつを掴んだところ、猪が左右に分かれて逃げたのに手放そうとしなかったために、股が裂けて死んだという昔話から。米国や日本にもいますね。

2026・5・23

葦の髄から天井覗く

狭い知識、経験から大きな問題を判断すること。狭い見識しか持たない者が、とても力の及ばない問題を理解したつもりでいる愚かさ

を言う。葦の茎の穴をのぞき込んで天井を見るという意。

2026・6・1

洛陽の紙価を高める

書物が非常によく売れる事。出版した作品が大好評を得る事。中国西晋の時代、左思という詩人が、三都賦を著わして評判を得、これを人々が競って書写したので、都の洛陽では紙が品薄になり、値段が上がったという故事から。

2026・6・22

落花枝に還らず、破鏡再び照らさず

一度壊れてしまったものは、二度と元には戻らないと言う事。特に別れた夫婦が復縁することの難しさを言う。散り落ちた花はもう元の枝に戻ることは無く、割れた鏡は元のように物を映せないと言う意。

2026・6・28

理詰めより重詰め

相手に意見するのに理路整然と問い詰めるのは得策ではないという

戒め。重詰めは美味しいご馳走の
入った重箱。理詰めと重詰めの語
呂合わせで言ったもの。

2026・7・3

流言は知者に止まる

噂話はあっという間に広がるものだが、知恵のある者はそれが根拠のない話だと知ると、真に受けず広めることをしないので、そこでとどまってしまうと言う事。スマホ愛好者は良く考えるべし。

2026・7・8

竜頭蛇尾

はじめは大変威勢が良いが、次第に
尻すぼみになり、最後はサッパリ振
るわないこと。高市総理のことか
な。

2026・7・12

良禽は木を相て棲む(りょ
うきんはきをみてすむ)

賢いものは仕えるのに良い主君を選
ぶという事。又職業や環境を選ぶこ
と。鳥は木の枝ぶりなどを、よく選
んで巣作りをすると言う事から。

2026・7・18

燎原の火

物事が防ぎようもないほどの勢いで広がっていく様子。燎原は野原を焼くこと。広い野原を焼く火が、どんどん燃え広がっていくことから。高市政権も遂に火が消えかけてきましたね。

2026・7・22

遼東の豕（りょうとうのいのこ）

見識不足のために、たいして価値のないものを珍重して得意がることのたとえ。豕は豚。黒い豚しかいなかった遼東地方で白い豚が生まれて、

大変珍しく思った持ち主が宮廷に献上しようとして河東まで来ると、そのあたりでは豚がどれも白いのに気づいて引き返したという故事からら。

2026・7・26

綸言汗のごとし

ひとたび口にした発言は、もう取り消せないと言う事。綸言は君主の命令、詔勅。汗が体内に戻らぬように、君主の言葉も訂正や撤回は出来ないと言う意。

2026・7・31

累卵の危うき(るいらん)

非常に危険で不安定な様子。累卵は積み上げた卵。今にも崩れて潰れそうだという意から。高市政権のことかな。

2026・8・8

連木で腹を切る

出来るはずのないことのたとえ。連木はすりこぎ。杓子で腹を切る、杵で頭を剃るは同義語。

2026・8・22

瑠璃も玻璃も照らせば光 る（瑠璃は紺色の宝石、玻 璃は水晶）

真に優れた人物はどこでも際立
ち、埋もれることは無いと言う
事。また、有能な人物は機会さえ
与えれば必ず真価を発揮すると言
う事。

2026・8・29

蠟燭は身を減らして人を 照らす

人のために自分を犠牲にして尽く
すたとえ。蠟燭はあたりを明るく

照らしながら、自身は少しずつ短くなり、最後にはなくなってしまう事から。

2026・9・5

老少不定は浮世の習い(ろうしょうふじょう)

人の死が予測しがたい事。人は年令の順に寿命を迎えるわけではなく、若者が老人より先に亡くなることもあるという意。

2026・9・10

老馬の智

経験を積んだ者は、正しい判断を

下せると言う事。年長者の経験から生まれた知恵を尊重する言葉。

中国の春秋時代、齊の桓公の軍が冬の道に迷ったとき、老馬を放ちそのあとに従うと、無事に国へ戻る事が出来たという故事から。

2026・9・16

魯陽の鉾（ろやうのほこ）

ありえない事を起こしてしまうほど勢力の大変盛んなことを言う、中国の戦国時代、楚の魯陽公が韓との合戦中、途中で暮れかかった太陽に剣をかざして命じ、呼び戻したという故事から。

2026 · 9 · 21

